

2013年3月17日マタイ 6:9-13「天におられるわれらの父よ」

今日から「主の祈り」を一節ずつ丁寧に読み解いていきたいと思います。「このように祈りなさい」とイエス様が与えてくださった祈りの手本です。私たちの祈りは罪人の祈りですから、ともすれば自分中心の身勝手な願いを祈って、神様の耳をわずらわせてしまうものです。さらに悪いことには、そうやって祈れば祈るほどに自分への執着が増えていって、かえって神から思いが離れていくということさえ起こりかねない。まことに祈りとは本質的に際どい営みでありまして、ですから私たちの祈りを整えて訓練するための手本として、イエス様が「主の祈り」を与えてくださったのです。

そのはじめは、「天におられるわたしたちの父よ」という呼びかけで始まるのです。父よ、お父様と呼びかけなさいと、イエス様は教えて下さいます。神に父よと呼びかけることができるのは、私たちが神の子として認められているから、あるいはまだ信者でない方も、神の子となるように招かれているから。だからそのように呼びかけることがゆるされているのです。しかしこれはとんでもない恵みです。このように神を呼ぶことは、本来決して赦されてはならないことです。

神は大いなる神であります。この世界を創られ、守り保っておられる、王の中の王、絶対者です。そういう方として、この方は私たちのすべてを握っておられるし、知っておられます。誰にも見せたくない、私たちの心の奥底のもっとも醜い感情まで全部知っておられる。あらゆる罪を数えておられる。そういう方の前で私たちは本来、裁かれるべき罪人としてしか立つことは出来ないものです。神に愛されるというのは当たり前のことじゃありません。私たちはそんなに立派なものじゃない。神に愛されることを要求するなら、私たちのほうでもどこまでも神を信頼して、神を愛さなければいけないのです。それができない私たちは、誰もが罪の子であり、「生まれながら神の怒りを受けるべき（エフェソ 2:3）」者たちです。全能にして聖なる神に、馴れ馴れしくお父さんと呼びかけることなど赦されていません。

しかし、キリストの十字架の贖いがすべてを変えてしまうのです。決して神に親しく近づくことなどできない者たちが、神の子として迎えられて、お父様と呼びかけることができるようになる。これは、神の恵みによって私たちに与えられる救いの喜びです。キリスト教における救いとはどういうことかと考える時に、色んな角度から応えることができますが、すべてを包括するような答えとして「神の子とされること」こそ救いであり、最大の慰めだと言うことができると思います。イメージとしては、寂しいみなしごであった者が、あたたかな家族の一員として養子として迎えられるという風に考えていただくと、この「子とされること」の恵みが際立ってくると思います。その家は気品に満ちた、決して近寄ることなどできないような高貴な王様の家ではありますが、その御曹司がわざわざ孤児を見つけ出しては一人一人連れ帰って、養子としてくださるようにと王なる父に頼みこむのです。父もまた、そういう王子の願いを喜んで受け入れて、みなしごを家族の一員として迎え入れる。そのようにしてその家には、

長男である王子の下に、たくさんの兄弟姉妹がいる大家族ができあがります。それが、神の家族です。私たちはそのようにして、長男であるイエス様の兄弟姉妹として、王の王なる神の家族に迎えられ、王子としてあるいは王女としての特権を享受し、そして、神を親しく父と呼ぶことができるのです。これこそ、最大の喜びであり慰めです。

残念ながら現代は、父の権威が失われてしまって、神が自分の父になってくださるということのありがたさがあまり実感できない方もいらっしゃるのではと思います。あるいは、実のお父さんとの関係に問題があるという方、お父さんがいらっしゃらないという方もいらっしゃると思います。でもそのような方はむしろ、イエス様が教えて下さる父なる神の大いなる愛に触れることで、心が癒されて行ってほしい、満たされて行ってほしいと思います。実のお父さんとの関係を乗り越えて行ってほしいと祈ります。

神は、まことの父として、子としてくださった私たちのことを完全な愛で愛しぬいてくださって、決して見捨てることはなさらないのだと、イエス様は教えてくれます。神はあなたの父として、あなたのことをあなた以上に心配し、愛しておられる。決して悪いようにはなさらない。「ハイデルベルク信仰問答 問 26 :

『我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず』と唱える時、あなたは何を信じているのですか。

答：天と地とその中にあるすべてのものを無から創造され、

それらを永遠の熟慮と摂理とによって今も保ち支配しておられる、

わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父が、

御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる、ということです。

わたしはこの方により頼んでいますので、

この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、

また、たとえこの涙の谷間へいかなる災いを下されたとしても

それらをわたしのために益としてくださることを、

信じて疑わないのです。

なぜならこの方は、

全能の神としてそのことがおできになるばかりか、

真実な父としてそれを望んでもおられるからです。」

これが、神を父としていただく神の子の慰めです。天地の創造者、支配者である永遠の神が、イエス・キリストの救いの御業のゆえに、わたしの神またわたしの父であってくださる。この全能の方が私に必要なすべてを備えてくださる。時には私たちにとって災いと思えないような苦難があり、悲しみが訪れる時もあるでしょう。しかしそれも、父が子を鍛えるために与えてくださる試練なのだ、私たちは信じていいのです。そう信じていることができるから、どん

な災いが与えられようとも、私たちは絶望しません。必ずそこにはお父さんからの愛のメッセージがあると、心を高く上げて、前に進むことができます。父が備えてくださるものに、意味のないものは一つもないからです。私たちの救いのために、必ず、今最も必要なものを備えてくださいます。神は全能の神として、そのようにすることができなのです。そして、私たちの真実な父として、そのようにすることを望んでいてくださるのです。

そんな父なる神を信頼しなさい。それが、イエス様が教えて下さっていることです。主の祈りの一番はじめに、「天におられるわたしたちの父よ」と呼びかけることを教えてくださったのは、神への信頼ということ、まず私たちに教えるためであります。神を信頼しなさい。この信頼がなければ、どんな祈りであってもむなししいものです。だから、まず思い出しなさい。神は今やあなたの父でいてくださって、決して悪いようにはなさない。

そういう絶対的な神への信頼を新たにしながら、「天におられるわたしたちの父よ」と呼びかけさせていただきたいと思うのです。今回準備をしながら、私にはそのような信頼が欠けていることを強く思われました。先週の御言葉メールの中で、間違った祈りということについて思いめぐらしたのですが、その中で、一つのエピソードを紹介させていただきました。それは私が神学生だった時のことです。神学校には、日本での宣教師となるために学んでいる韓国の兄弟たちもたくさんいます。韓国の人々というのは本当に祈りに熱心ですが、その中のお一人から、坂井さんもっと神様に多くのことを期待するべきだと忠告をいただきました。彼は言うのですね。「神様は本当に必要なものを全部備えてくださるよ。ぼくは昔、テレビが必要だと祈ったら、本当に思いを超えて与えられた。」真剣な顔でそう言うのでした。御言葉メールの中では、私はこのエピソードを、ちょっと危ない祈りの例として紹介しました。なぜなら、そのような祈りは一般的な日本人がお賽銭を投げて願掛けしているのと何も変わりありませんし、あまりにも自分中心であるように思えるからです。でも、そうは思いながらも、私はそのような韓国の兄弟の信仰の姿に直面して、自分に決定的に欠けているものを思い知らされたのも事実です。うらやましいとも思いました。そこまで親しく神に近づいて、本当に信頼して、天のお父様と呼びかけている。そんな神の家族の絆を、うらやましく思いました。私たちもまた、そのようにしてお父様と呼びかけていきたいと思えます。きっと神様は、私たちが間違った祈りをするよりも、期待もしないで願おうとしないことのほうを、さみしく思われるのだと思えます。

ここまでで「父よ」という呼びかけについて、深く思い巡らしてまいりました。続いて覚えるたいのは、「天におられる」ということです。神は「天」におられる方です。それは逆に言えば「地」にはおられないということです。この場合「地」とは、私たちの生きる地上世界です。時間、空間において制約されたこの地上世界で生きる私たちには限界があります。地に生きる人間は無力で弱い存在です。そして残念ながら私たちは、そういう私たちのほうから出発して、

私たちのほうにひきつけるようにして神のことを考えがちです。自分の願望を神に押し付けて、これが神の御心だと自分勝手に思い込んだりして、自分のサイズに合わせた自分のアクセサリとしての神を作り出そうとするのが、地に住む人間の悲しさです。何よりそれは、祈りの問題において浮き彫りにされてきます。私たちは、神を自分のサイズに合わせてしまって、あまり多くのことを期待しないということがしばしばあるのではないのでしょうか。しかし、神は地ではなく、天におられる方なのです。

イエス様は、わざわざこの「天」という場所を指し示すことで、私たちの心を高く上げさせようとしておられるのです。見よ、天を見上げよ、神を見上げよ。神は我々とは異なる方なのであって、高くいまし、大いなる力を持ち、理解を超えているお方なのです。神が天におられるということを、もっと強く覚えさせていただきましょう。「天にまします」というこの小さな言葉を、けっしてぞんざいに扱わないようにしていきましょう。祈りというのはどうしても習慣的になってしまいますので、天の父なる神様という呼びかけが何の感動もない慣用句になってしまいがちです。しかし、父なる神と呼びかけることができるのはすごいことなのです。そして、その父は天におられるというのです。イエス様は、この小さな呼びかけの言葉を通して、私たちの心を高く、広く押し広げて、神の御支配しておられる大宇宙全体を見させようとしておられます。

「視線の転換」が促されているのです。地上から天へ、人から神へ。「天にまします」というこの小さな言葉を大切にする時に、私たちはイエス様とともに、限りない天の高みまでのぼっていくことができるのです。そうやって心を高くあげられて、景色が変わるということが大切です。自分の小さな狭い世界に閉じこもっていても、どうしても祈りが小さくなってしまうものです。大自然の雄大な景色をのぞむことのできる場所に旅をすることで、神に対する理解が変わったという経験をされた方もいらっしゃるでしょう。私もアメリカ旅行で、ミシガン湖を見た時にそんな経験をした。そういったところに行くと、確かに祈りが変わります。天地を創造された神の圧倒的なスケールを体感することができるからです。でも、そんな旅行をしなくても、「天にましますわれらの父よ」という、この小さな呼びかけの言葉を本当に大切にしていくなると、私たちの祈りの世界は確実に高く大きく広げられるはずで、神の慈しみによって支配されている宇宙全体が視野に入ってきて、神に期待せざるを得なくなるはずで、

そして、そのようにして視野が広がると、自分以外の人の存在も見えてきます。「わたし」だけではない、隣人の存在が見えてきます。このことを最後に考えましょう。これがとても大事なことなのです。イエス様が教えてくださった主の祈りは、そういう自分以外の人の存在を意識することなく祈ることはできないものです。イエス様は、「わたしたち」の父よと、呼びかけなさいと教えてくださいました。「わたしの父よ」ではないのですね。もちろん「わたしの父よ」と個人的に神に親しく呼びかけることは間違いではありません。けれどもイエス様は、あえて「わたしたちの父よ」と呼びかけるように教えてくださいました。イエス様はわたしたちに、

すべての兄弟姉妹とともに、この主の祈りに向かうようにと教えてくださっているのです。全世界の、一人の神を父とする神の家族が声をそろえて、主の祈りを祈ることができるなら、どれほど壮大でありましょう。私たちは、特に日本においてクリスチャンはマイノリティで、学校や職場やご家庭にあって孤独を覚える方もいらっしゃるでしょう。しかし私たちは孤独ではありません。声を一つにして「わたしたちの父よ」と祈ることができる、全世界の兄弟姉妹がいるのです。

そしてイエス様は私たちに、そんな兄弟姉妹の「ために」祈るといことも教えてくださっています。この「わたしたちの父よ」という呼びかけを解説するにあたって、カルヴァン先生が言っています。これは私たちが祈る時に、祈ることを通じて互いに心を配りあい、互いに愛し合う修練を受けるためである。めいめいが自分のことだけ心配し、他の人のことを忘れることがないためである、と。愛する教会の兄弟姉妹の顔を具体的に思い浮かべながら、特に、今祈ることもできないほどに弱っている方々のことを思いながら、確かに神はこの方の父でもいってくださいと思い起こして、神よこの人を助けてくださいとの祈りをもって「わたしたちの父よ」と声に出してみるといいでしょう。また、そのようにして思い浮かべるべきは、信仰の告白をしておられるクリスチャンに限る必要はありません。神は、この地上に生きる、すべての人々の造り主であって、すべての人々から「父よ」と呼びかけられたいと願っておられます。ですから、私の隣にいるすべての人々、特に今苦しんでいる人、悲しんでいる人を思い浮かべながら、その方々と共に、その方々のために「わたしたちの父よ」と呼びかければいいでしょう。天におられるわたしたちの父は、わたしたちが父に立ち返り、父にふさわしい期待をするのを待っておられるのです。